

第一四回

アジ研図書館とミャンマー近代史資料 — 私の緬学事始 —

長田紀之

私はミャンマー（ビルマ、緬甸^{めんとん}）の近代史を専門に勉強してきました。この道に足を踏み入れた最初の一步が学部の卒業論文で、それ以来、アジ研図書館には大変お世話になっていきます。今も昔も首都圏でミャンマー近代史の史資料をまとめて所蔵している機関はそう多くありません。そこで、当時住んでいた場所からは少々遠かったのですが、卒論執筆のために、幕張に移ったばかりのアジ研図書館へ足しげく通って所蔵資料を閲覧することになりました。

アジ研図書館での一番の目当ては植民地議会の議事録でした (Proceedings of the Legislative Council など)。私の卒論のテーマはイギリス植民地時代の公衆衛生政策とその社会への影響でしたから、ひとつひとつの政策がどのような議論に基づいて決定され、どのように評価されたのかを知るために、植民地議会の議事録は魅力的な史料でした。ミャンマーは一九世紀中に段階的にイギリスによって植民地化され、英領インドの一州ビルマ州となりました。ビルマ州では一八九七年に初めて立法参事会という植民地行政の諮問機関が設置されます。第一次世界大戦後、インドにおける民族自治と地方分権化の流れに於いて、ビルマ州の立法参事会も規模と権能が拡充されました。そして、一九三七年にはビルマはインドと分離されて別個の植民地となり、二院制の議会が設置さ

れました。アジ研図書館には、一八九七年から日本軍が占領する一九四一年までの議会議事録の大部分が所蔵されています (一九三七年以降の上院議事録のみ未所蔵)。これを閲覧できたおかげで、なんとか卒業論文を書き上げ、大学院に進学することができました。

議会議事録以外にもアジ研図書館は様々なミャンマー近代史資料を集めています。なかでも重要なのが地誌 (Gazettes) と地租査定報告書 (Settlement Reports) です。どちらも二〇世紀前半に展開された植民地政庁の一大プロジェクトの成果です。前者は、各県ごとの地理や人口、歴史についての概括的な叙述で、各地方の状況を知るのに役立ちます。後者は当時の主要財源であった地租の査定のための調査報告書で、やはり県ごとに細かに社会経済状況が叙述されています。これらは植民地期の研究に欠かせない重要な史料です。また、変わったところでは、一九四〇年の植民地議会選挙の際、当時の首都ラングーン (ヤンゴン) の選挙区で作成された選挙人名簿 (Electoral roll of members of the Rangoon urban constituency) もあります。地区ごと選挙人の名前や住所が羅列されているだけであり、不備や間違いも少なからずあるので扱い方が難しい史料です。しかし、当時の住民に関する具体的な情報を得るきっかけとなりうるものでもあります。

植民地政庁の公刊物のみならず、有用な研究文献も揃っています。まず、一九一〇年に設立されたビルマ研究協会の紀要 (The Journal of the Burma Research Society) があります。これは協会設立の翌年から一九七九年まで刊行が続いたミャンマー研究の本丸ともいえる研究誌です。第二次世界大戦以前のものは再刊され比較的アクセスしやすいのですが、独立後に刊行されたものはなかなか現物を目にすることができません。アジ研はこの期間の希少な雑誌を現物で所有しています。第二に、中国語の東南アジア研究誌が充実しています。このコレクションは出色です。暨南大学東南アジア研究所の『東南亜研究』、雲南省社会科学院東南アジア研究所の『東南亜』、厦門大学南洋研究所の『南洋問題研究』などが所蔵されています。これらには東南アジアと中国の関係や華僑華人に関する研究が数多く掲載されています。こうした分野のミャンマーに関する研究は相対的に少ないですが、日本語や英語では得難い情報が中国語誌から得られることもあります。

ミャンマー近代史に関わる基礎的な史料がこれだけまとまって所蔵されている機関は日本国内に屈指り数えるほどしかありません。アジ研図書館は開架式で広々とした快適な空間のなかでのびのびと勉強することができます。また、スタッフの方々もとても親切です。ここを利用してミャンマー研究の道を歩み始める人たちが後に続くことを願っています。
(おさだ のりゆき/アジア経済研究所 動向分析研究グループ)